

婦長のいる日常

「お疲れ様でした」

店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は黄色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、それから僕は、視界いっばいに広がる街を眺めた。

なんとということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。

魔術王による人類史焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

「……………」

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れていた。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

「……………」

胸の内を、万感の思いが満たす。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えてる。

そこで得た出会いや別れも、何一つ忘れることなく鮮明に記憶している。

——我が親愛なる、白衣の天使のことも。

「……帰ろう」

僕もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から十五分。

大橋を渡った先にそのアパートは存在する。

何事も清潔が大事と言ってこのアパートへの居住を決めた相手は、部屋が少なく

て掃除がしやすいとのことで気に入っているようだけど、個人的にはもう少し広い所に引越したい所存だ。

なにせ大事な、きつと世界で一番尊敬する人を住まわせるのだから。

……まあ、今のところ主に予算の都合で引越しの予定はないんだけど。

甲斐性なしな自分に半ば呆れながら見慣れた階段を上る。

二階の端。

日当たりのいい角部屋の、比較的真新しいチャイムを押すと、ドアの向こうからパタパタと足音が届き、そして、

「おかえりなさい、マスター」

そんな、落ち着いた声が僕を出迎えてくれた。

ナイチンゲール。

世界的に有名な看護師は、セーターの上に猫の肉球がスタンプされたなんとも愛らしいエプロンを着ていて。

カルデアではお目にかかることになかった家庭的な姿には思わず頬が緩んでしまふ。

「マスター？ 私の顔に何か？」

「ああいや、なんでもない。……ただいま、婦長」

「はい。お疲れ様です」

笑顔を向けると、婦長もほんのりと淡い笑みを返してくれた。

それだけで身体に溜まっていた疲れが消し飛んでいくのを感じる。婦長の笑顔最高。宝具にも匹敵する治癒力だ。

「ああ、そうだ。婦長これ」

「これは？」

「猫の箸置き。だらんとしててすごく可愛いんだ」

「そうですか……今開けても？」

「もちろん」

興味津津な婦長に苦笑しながら頷くと、婦長はそそくさと、しかし丁寧にラップを開け、中から小物を取り出した。

「これは……」

「どう？ 可愛い？」

「ええ、とても愛らしいです。ずっと撫でていたくなりますね」

言いながら、婦長は少しだけ嬉しそうに表情を和らげ、陶器の猫の背をその細い指で撫でた。

よかった。気に入ってもらえたようだ。

「ありがとうございます、マスター。大事に使わせていただきます」

「うん。そうしてもらえると僕も嬉しいよ」

うんうんと頷く僕に、しかし婦長はじろりと僕を睨んだ。

「ですが、最近少し散財気味に思えます。先週もマグカップを買って帰ってきました」

「そ、そうかな？」

「そうです。今履いているこのスリッパもそうです」

「んー……でも、そこまで値の張るものじゃないし、それに……」

「それに？」

「……婦長、生きてた頃は猫たくさん飼ってたんでしょ？ このアパートでは猫は飼えないから、せめて色々猫の小物があつた方がいいかなって思ったんだけど……」

「……………」

そう言った僕に、婦長は顔を赤くした。

どうやら自分の好み知られているとは気づいてなかったらしい。

「それは……お気遣い、ありがとうございます」

「あ、いや、そんな。僕がしたくてやってることだから」

「……ですが、それでも次回からは控えてください」

「う、うん……まあ、モノも十分揃ってきたし、貯金も大事だもんね……」

「それもあります……」

「？ 他にも理由があるの？」

「……………」

問うと、婦長は頬を赤く染め、視線をこちらから逸らしながら、

「……寄り道せず、まっすぐに家へと帰ってきていただきたいので」

そう、ぼつりとおぼやくように言った。

「……………」

言ってる意味を理解した直後、僕は自分の頬が熱くなるのを感じた。

寄り道をせず家に帰ってこい。

それはもちろん僕の身の安全のためでもあるんだろうけど、それ以外の意味もきつと含まれていて。

「ご、ごめん……明日からはまっすぐ帰ってくるよ。婦長と、少しでも長く一緒にいるために」

「……ありがとうございます」

「いや、こちらこそ……」

「……………」

「……………」

沈黙が降りてきた。

でもそれは、決して居心地が悪いものではなく。

「ふ、フロー……」

そつと彼女を抱きしめようとした僕に、

「待ってください、マスター」

そつと制止が入った。

彼女は真面目な表情で僕を見つめ、

「外から帰ったら手洗いうがいです。健康のために徹底してください」

「はい……」

「分かりましたら洗面所へ。カバンはこちらで消毒しておきます」

「お願い……」

彼女にカバンを預け、とぼとぼと洗面所へ向かう。

断られちゃった……いや、今回は僕が悪いんだけど。

仮にも相思相愛なのにハグより手洗いうがいを優先するカップルってなかなか

新しいなあ……。

しょんぼりしながら手洗いうがいを入念に済ませ、彼女の元へと戻る。

「洗ってきたよー」

「結構。では……」

言つて、婦長はついと顎を上げ、目を閉じた。

「……?」

一瞬理解ができなかった僕に、婦長はパチリと目を開け、

「……先程は、キスをする算段ではなかったのですか」

「え？」

「手洗いうがいを済ませた後でしたら、問題はありませぬので」

呆けた声を出した僕の眼前、婦長は頬を赤らめながらそう言うてのける。

ああ、そうか……さっきのはハグを断られたんじゃないやなくて、『キスはいいいけど先
にうがいでからね』って話だったのか……。

なるほど、とひとりごちる僕に、婦長は不安そうな顔をして。

「……何か、勘違いをしていたでしょうか」

「う、ううん!? 全然!? いや、むしろごめんね! キス大好きで!」

慌てて告げた僕に、しかし婦長は頬を赤らめながらそっと視線を逸らし、

「いえ……私も、貴方との口づけは嫌いではありませんので」

「ヴウツ」

「マスター!」

「だ、大丈夫……ちょっと心停止しかけただけだから……」

「心配をさせないでください。……貴方一人の身体ではないのですから」

「ヴー」

「マスター！」

ダメだ……この婦長強すぎる……。

デレ婦長強い。改めてそう思った。

「……フロー」

「！……はい」

名を呼ぶと、今度こそ彼女はそつと目を閉じた。

僕はその肩に両手を置き、ゆっくりとその距離をゼロにした。

「ん……」

永遠のように思える刹那の後、

「……たたいま。たたいま、フロー」

「……はい。おかえりなさい、マスター」

僕と彼女は、二人、挨拶を交わし合うのだった。